月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.117



あのキャラクターがまさかのハロウィン衣装に!?
『英雄伝説 暁の軌跡』

チーム"記憶喪失"大集合!?
も〜っと集まれ！ファルコム学園

『軌跡』シリーズ始まりの物語を振り返る
英雄伝説 空の軌跡

ファルコムニュース

王都グランセル攻防戦、ついに決着!!

英雄伝説 空の軌跡SC 〜絆の在り処〜



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



10月の
新／衣装替えキャラクターをチェック！

THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
10 月はメインストーリーの最新章が実装！
さらに、ハロウィンにあわせて新たな衣装替えキャラクターも登場！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

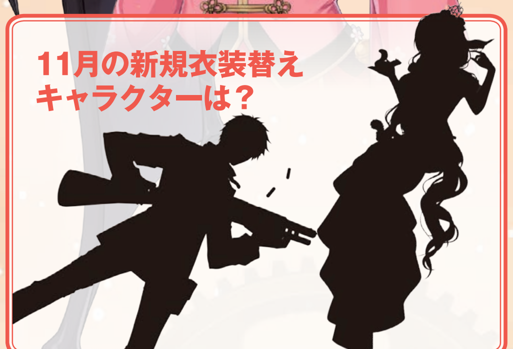
ハロウィン・クロエ

ハロウィンということでクロエはキョンシーの仮装に挑戦！ 昨年はコンビを組むナハトが同じコンセプトの衣装で登場していただけに、改めて仮装コンビの誕生だ。

ハロウィン・マクバーン

悪魔のような禍々しい衣装をチョイスしたマクバーン。でも、《火焔魔人》の貴方にそんな衣装を着られてしまったら、ちょっと洒落になってないです……

11月の新規衣装替えキャラクターは？

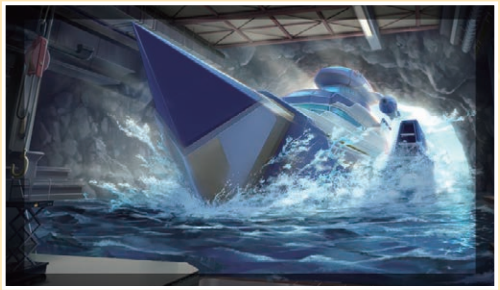


メインストーリー 第７章第６弾「毒蛇の輪郭／後篇」が実装！

とある邸宅。“彼”とオルソンは夢を語り合う。
それぞれが思い描いていた夢は現実になろうとしていた。
これは一つの“方法”であり、最善なものであると――
“彼ら”は確信している。全ては『より良き未来』のために――。









次回、終章第１弾「宣戦布告／前篇」は 12 月中旬実装予定！

※画像は開発中のものです。 ※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

★記憶喪失からはじまる物語★



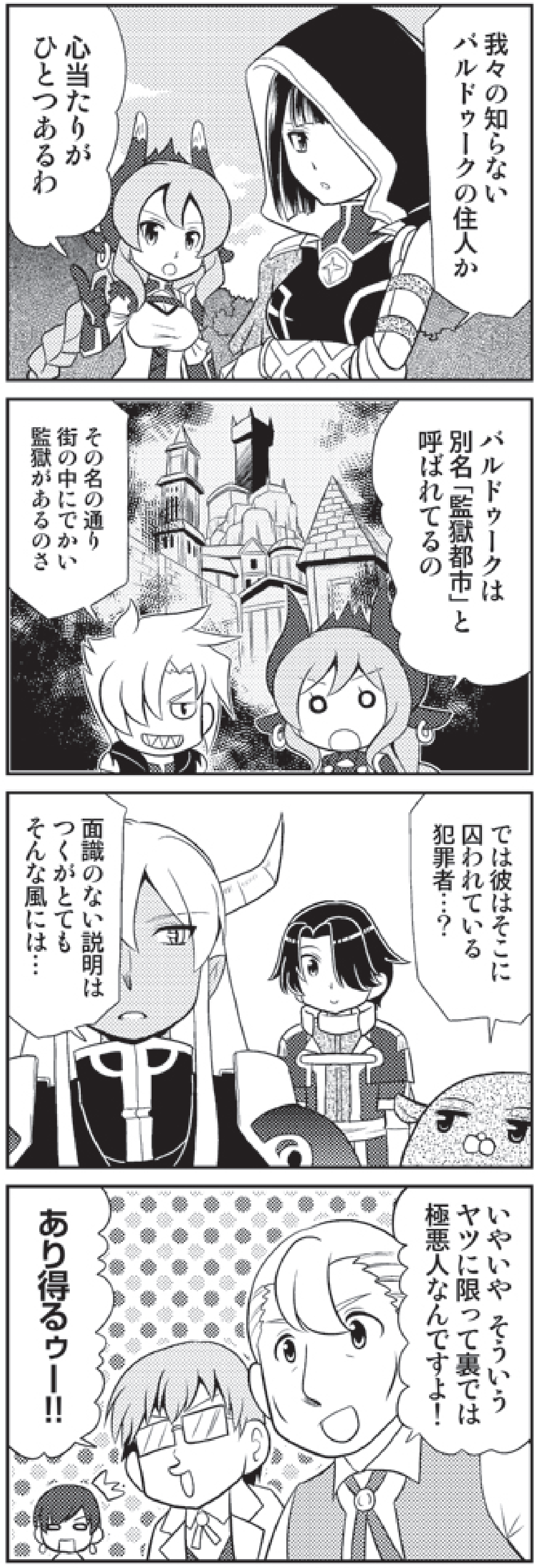
使えないヤツ



アレ



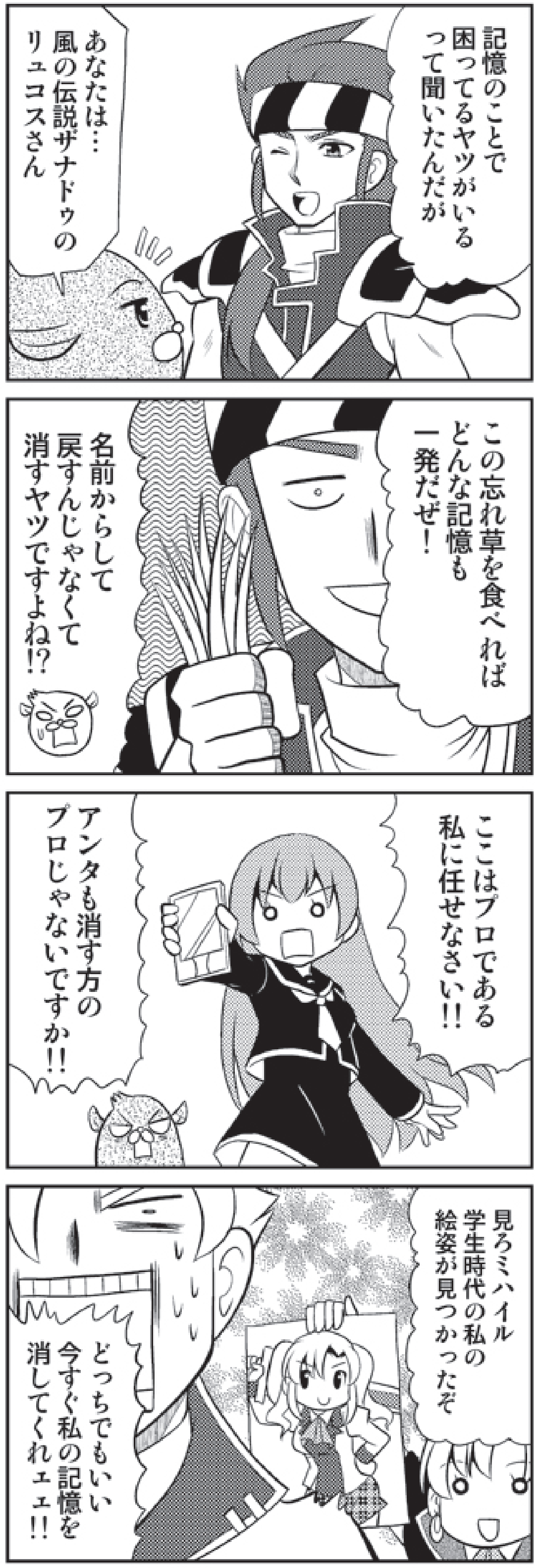
心当たり



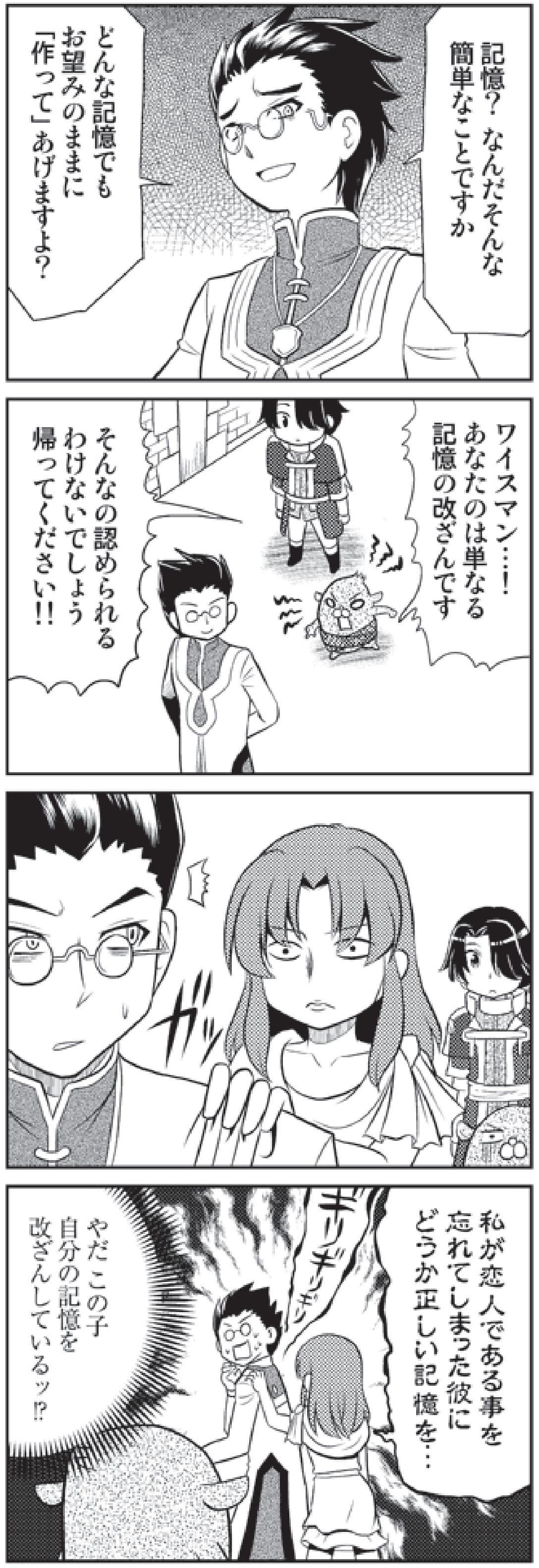
もちろんその1は僕さ



困ってるヤツ



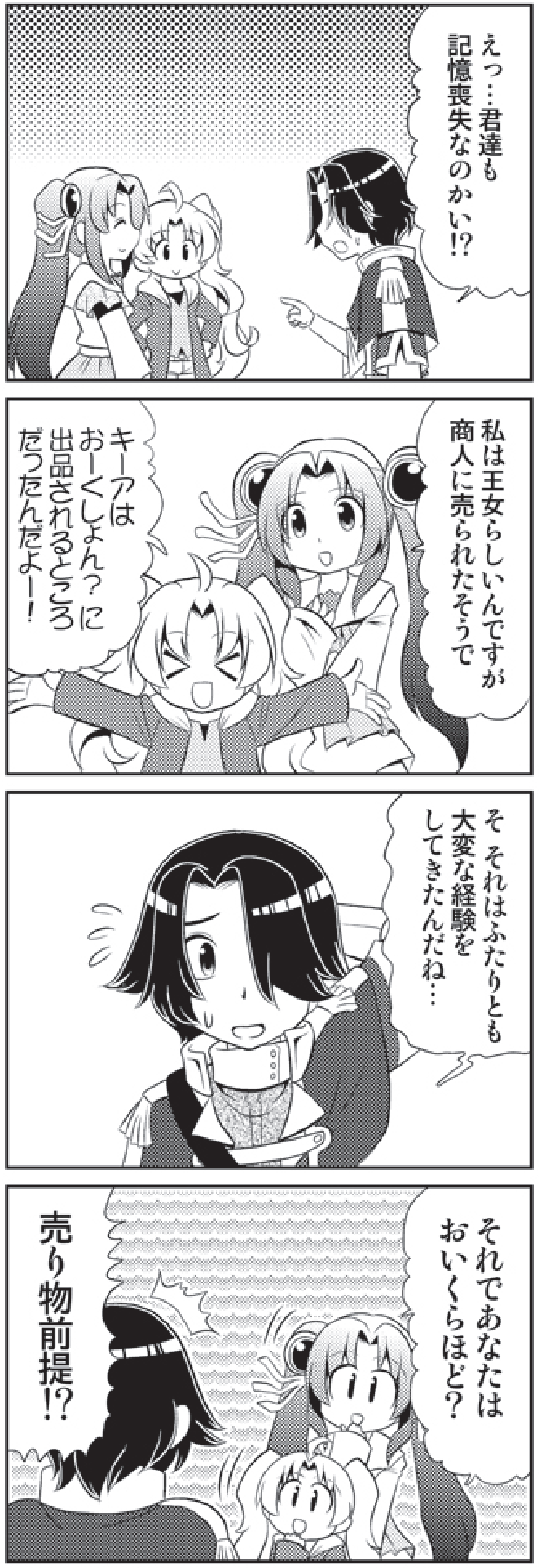
改ざん



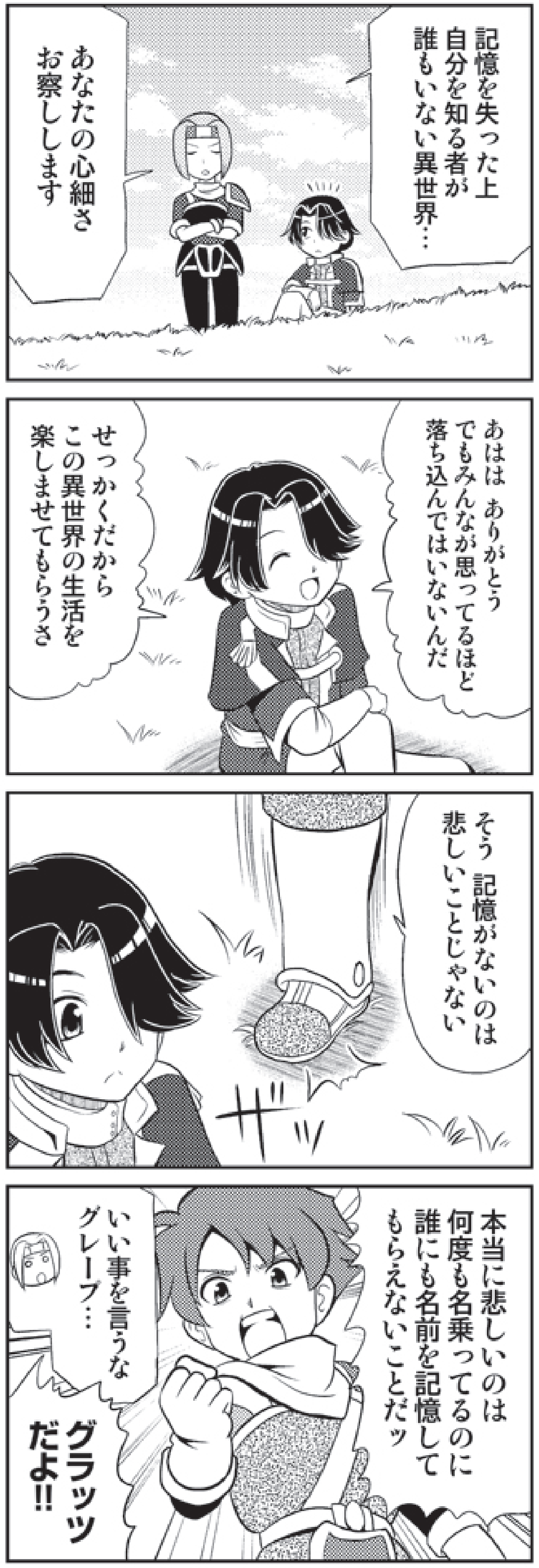
その正体



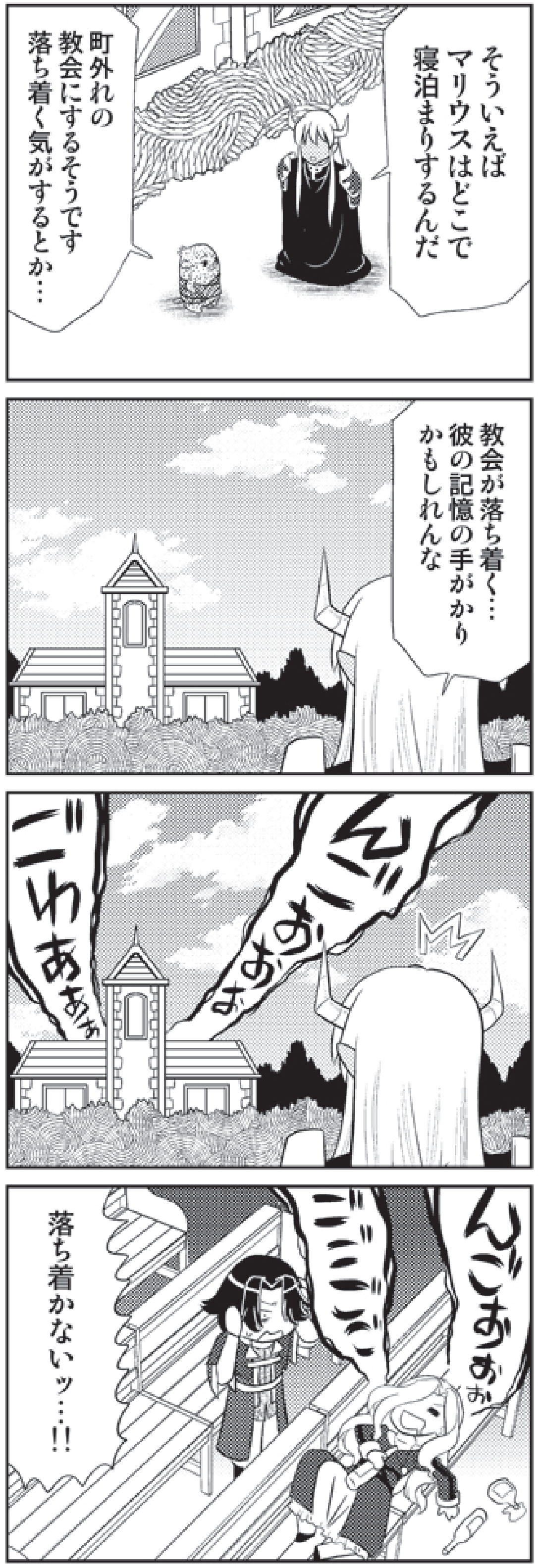
記憶喪失ハウマッチ



グラッツ



落ち着く場所



正体を知る者



SHOCK



アドルと美少女



よみがえる記憶

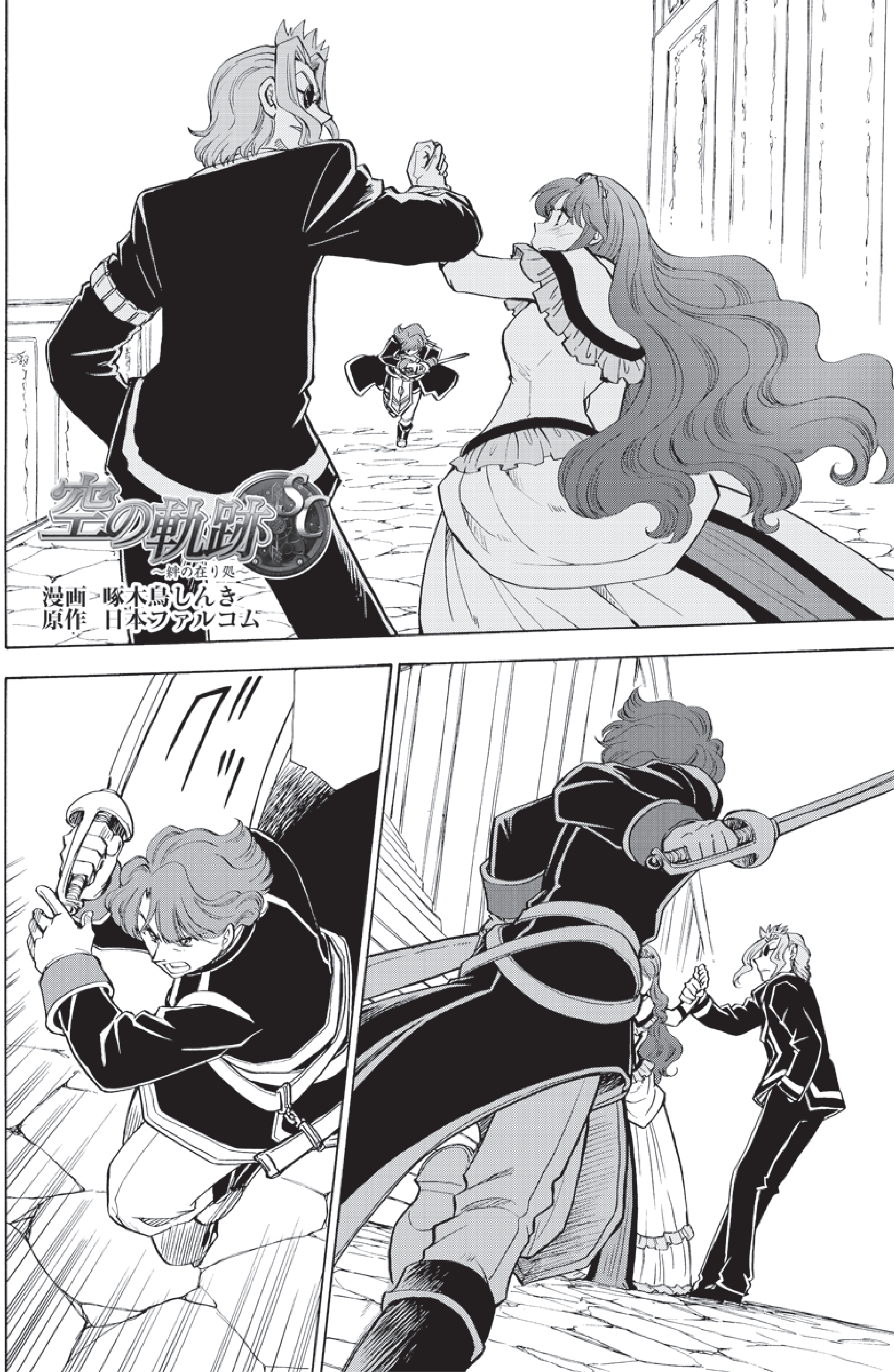




発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks



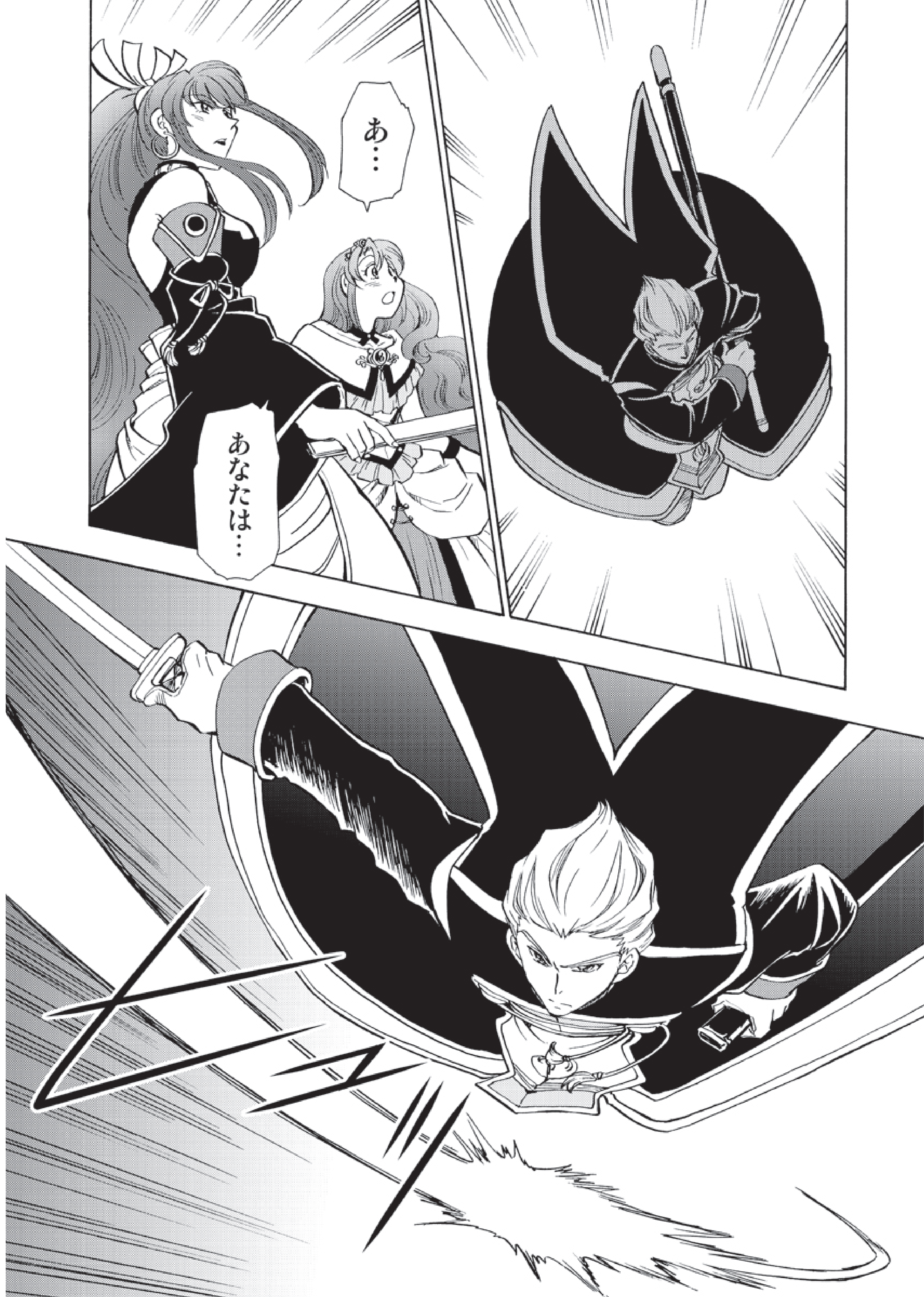
発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら ➔ www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら ➔ www.field-y.co.jp/falcombooks

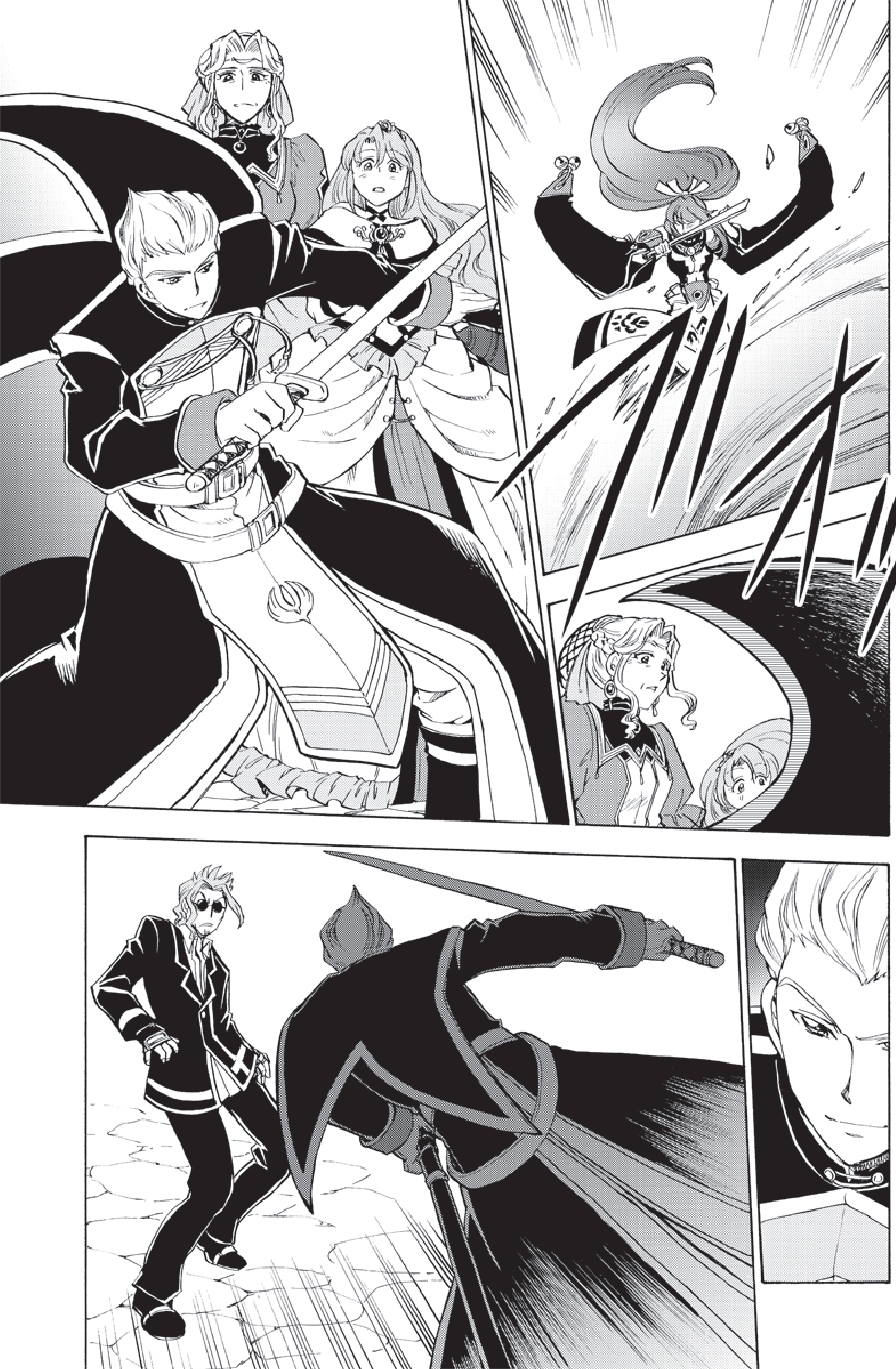

空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム


たっ


シ
シード中佐！
貴殿がシード…
《剣聖》に連なる者か
剣聖！いいねェ！
次はあんたが遊んでくれるってか!?
いや
自分はあくまで囮なのでね


ピュイ！
ジーク！
ダ！


あ…
あなたは…




チッ…
ヴァルター！
ルシオラ…
ドオッ
くっ…
きゃあ！


んもう！
いきなり襲ってくるなんて卑怯じゃない!?
その言葉そっくりそのままお返ししたいところだな…
陛下
殿下
遅くなって申し訳ありませんでした


リシャール大佐…
どうして…あなたが…
逆賊でありながら御前にまかりでる無礼をお許しください
どうか一時の間
御身を護らせて頂けますよう…
もちろんです
お願いしますね
…ありがたき幸せ
我らが来たからには陛下と殿下には指一本触れさせはしない！
貴殿らも早々に立ち去るがいい！


アラン・リシャール
マクシミリアン・シード
さすがは《剣聖》を継ぐ2人というところか
でもいいのかしら？
女王様ばかり守ってる間に
グランセルの街は壊滅しちゃうかもしれないわよ？
もちろん
既に手は打たせてもらったよ


これより
グランセル市街における
人形兵器と猟兵団の
掃討をはじめる！
市民の保護及び正規軍の支援は
最優先で行いなさい!!
イエス・マム!!


くそっ……
我々だけじゃ もう これ以上は…
ダッ
元王国軍 情報部 特務兵だ！
正規軍に 加勢する!!


白兵戦なら 我らの十八番だ！
導力器に 頼り切った 奴らなどには 負けはしない！
我々は 戦える!!
あきらめるな!!


おいおい！
マジかよ!?
どうして特務兵がいきなり現れやがるんだ!?
あいつら全員逮捕されてまだ服役中のはずだろ!?
しかも敵対してた王国軍と一緒に…
仲間だったはずの結社の手先を攻撃してる…!?
きっと反省してみんなを助けに来てくれたんですよー
汚名挽回ってやつですねー！
汚名を挽回してどーするよ
ドロシー！この光景しっかり写真におさめとけよ！
あいあいさー！


伝えようぜ！
汚名返上しようと頑張るあいつらのこと
どんな困難にも立ち向かい
何があっても乗り越えようとする人たちのことを
これがこの国
リベール王国の姿だってな！


さあ
身喰らう蛇の
諸君
それでも我々と
やりあうつもりは
あるかな？
やれやれ…
これ以上
こだわるのは
美しくなかろう
少し
遊びすぎた
かしらね
ふん…
仕方ねぇな
それでは
諸君
我々は
これで
失礼しよう


だが
次なる試練は
既に
君たちの前に
控えている
気を抜かぬ
ようにしたまえ
次なる試練？
ふふ
すぐに
わかる
でしょう
それでは
皆様
ごきげんよう
次回に続く

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『ラングリッサー モバイル』×『英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ』コラボレーションイベント開催中！

日本国内で開催中の「英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ」コラボレーションイベントでは、「閃の軌跡」シリーズからリィン・シュバルツァー、アルティナ・オライオン、そして《鋼の聖女》アリアンロードが「ラングリッサー モバイル」の冒険の舞台となる、エルサリア大陸に登場。

また、期間限定クエスト「奇跡が刻む答え」ステージが実装され、イベント期間中はステージクリアによってポイントを獲得できるほか、「アルティナ」の記憶の破片をはじめとする様々なアイテムを入手できます。





「時空の扉」から、再び灼熱の光が辿ってくる――。突如、エルサリア大陸に転送された「トールズ第Ⅱ分校」教官リィンと生徒のアルティナ。襲い来る未知の魔物を「鬼化」によって撃退するリィンだったが、その力を察知したギザロフに目を付けられ、攫われてしまう。

リィンを救出するため、剣鋳軍と協力するアルティナ。一方、ゼムリア大陸でのとある「計画」を実現するため、リィンを失うわけにはいかない「聖女」もこの世界へと舞い降りていた。

それぞれの思惑は違えど、目的は同じ。

果たして彼らはリィンを救い出し、無事ゼムリア大陸へと戻れるのだろうか――？



《リィン・シュバルツァー》
帝国北部、温泉郷ユミルを治めるシュバルツァー男爵家の養子。帝国内乱で活躍し、《灰色の騎士》としてその名が知られるようになった。《八葉一刀流》中伝の実力者で、普段は太刀を武器として使用する。



《アリアンロード》
ゼムリア大陸で暗躍する結社《身喰らう蛇》の最高幹部である《使徒》の第七柱で、《鋼の聖女》の異名を持つ。結社内では誇り高き武人として一目置かれており、彼女を慕う者も多い。



《アルティナ・オライオン》
技術ネットワーク《十三工房》の一つ、黒の工房に所属する少女で、漆黒の傀儡「クラウ=ソラス」を操る。コードネームは《黒兎（ブラックラビット）》。感情の起伏が乏しく、自身を「道具」と言い切るなど冷めた感情を持つ。



『ラングリッサー モバイル』とは

シミュレーションRPG「ラングリッサー」シリーズの公式作品として、歴代ストーリーを引き継いだ内容となっています。ユニットの相性や地形による影響といった要素を考慮しながら戦術を組み立てるシステムを踏襲しているほか、原作シリーズのストーリー、人気キャラクターも収録。さらに「ラングリッサー モバイル」では新規ストーリーが追加され、原作ファンだけでなく、初めてのプレイヤーでもすんなりと楽しめる"遊びやすさ"がウリとなっています。

『ラングリッサー モバイル』概要
■対応OS：iOS／Android　■ジャンル：シミュレーションRPG　■価格：基本無料（ゲーム内アイテム課金制）
■配信地域：日本、中国、台湾、香港、マカオ、東南アジア、北米、オセアニア、EU加盟国の一部　■公式サイト　https://langrisser.zlongame.co.jp

『英雄伝説 創の軌跡 オリジナルサウンドトラック』と『Falcom アクースティックス2』の2作品が12月16日に同時発売決定！

『英雄伝説 創の軌跡（はじまりのきせき）』の劇中曲を収録した3枚組音楽アルバム『英雄伝説 創の軌跡 オリジナルサウンドトラック』、そして、日本ファルコムが手掛ける高解像度ハイレゾ録音による全曲新アレンジの完全オリジナルアルバム第2弾『Falcomアクースティックス2』が12月16日に同時発売。

各音楽配信サイトでのダウンロード販売のほか、「e-onkyo music」「mora」「music.jp」などハイレゾ配信サイトでのハイレゾ音源版販売も同日より開始されます！



『英雄伝説 創の軌跡 オリジナルサウンドトラック』

作品全体を彩るイベント曲『LAPIS』をはじめ、『夢幻の彼方へ』、『Infinity Rage』、『激烈！撃滅！ミシュナイダー！！』などゲーム内で使用された楽曲を収録。更に、ボーナストラックとして主題歌『NO END NO WORLD』のフルバージョン／Less Vocalバージョン、序章エンディング曲『Long Awaited』のフルバージョンを収録した全81曲、200分超の3枚組サウンドトラック！

尚、初回生産分のみ『英雄伝説 創の軌跡』の作品世界をイメージした豪華仕様の特殊パッケージとなります。

■発売日：2020年12月16日（水）
■収録曲数：全81曲（CD3枚組）
■価格：【CD盤】　3,400円（税抜）
【ダウンロード版】［アルバム］　2,917円（税抜）／［単曲］　139円（税抜）
【ハイレゾ音源版】［アルバム］　3,148円（税抜）／［単曲］　231円（税抜）
※CD盤は初回生産分のみ、特殊パッケージ仕様となります。



『Falcomアクースティックス2』

高解像度なハイレゾ音源で超リアルな音響を再現！　至近距離で自分のためだけに生で演奏しているかのような、リアルな音響空間（Acoustics）を再現することを目標に企画・制作された完全オリジナルアルバム第2弾！

「ソーサリアン」の名曲『氷の洞窟〈洞窟Ⅱ〉』から最新作「英雄伝説 創の軌跡」主題歌『NO END NO WORLD』まで、このアルバムのためだけに楽曲を厳選し、専用アレンジを加えました。

ゲームミュージックファンだけでなく、音楽を楽しむすべての人に聴いていただきたい、という思いを込めて制作した『Falcomアクースティックス2』。耳元で演奏してくれているようなリアルな音を是非この作品で体感してください。

■発売日：2020年12月16日（水）　■収録曲数：全10曲
■価格：【CD盤】　2,400円（税抜）
【ダウンロード版】［アルバム］　1,661円（税抜）／［単曲］　185円（税抜）
【ハイレゾ音源版】［アルバム］　2,593円（税抜）／［単曲］　324円（税抜）
収録曲：CLOACA MAXIMA（イースⅨ-Monstrum NOX-）／Seize the day（東京ザナドゥ）／Get Over The Barrier!（英雄伝説 零の軌跡）／Overdosing Heavenly Bliss（英雄伝説 空の軌跡 the 3rd）／SUNSHINE COASTLINE（イースⅧ -Lacrimosa of DANA-）／嘆きのリフレイン（英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ）氷の洞窟〈洞窟Ⅱ〉（ソーサリアン）／翼を持った少年（イース -フェルガナの誓い-）／悲しき蒼穹を翔ける（ぐるみん）／NO END NO WORLD（英雄伝説 創の軌跡）

■音楽配信サイト
《iTunes. Store》http://itunes.apple.com/jp/artist/id120174391
《Amazon デジタルミュージック》http://j.mp/VSjC6N
《mora》http://mora.jp/artist/299183/all
《music.jp》http://music-book.jp/music/Artist/141849/Album

《OTOTOY》https://ototoy.jp/_/default/a/124419
※ハイレゾ音源版は全曲96kHz／24bit（WAV&flac）となります。
※「iTunes® Store」では高音質･DRMフリーのiTunes Plusで世界111ヶ国、ファルコム楽曲5,017曲を配信。

■ハイレゾ版音源配信サイト
《e-onkyo music》http://www.e-onkyo.com/search/search.aspx?label=Falcom
《moraハイレゾ配信ページ》http://mora.jp/artist/299183/h#discArea
《music.jpハイレゾ配信ページ》http://music-book.jp/music/Artist/141849/hiresoalbum

■関連サイト
《「英雄伝説 創の軌跡」公式サイト》https://www.falcom.co.jp/hajimari/
《「ファルコム 音楽CD」情報ページ》https://www.falcom.co.jp/music
《ファルコム音楽フリー宣言》https://www.falcom.co.jp/music-use

『英雄伝説 創の軌跡 ザ・コンプリートガイド』好評発売中!!

各種収集要素を取りこぼしなく進められる詳細な攻略チャートを掲載するほか、真・夢幻回廊もバッチリ攻略。もちろん、キャラクターや敵、アイテムなど、重要データも徹底網羅したファン必携の一冊です。また、『軌跡』ファンにはおなじみとなった新久保だいすけ先生による描き下ろし4コマや、本書でしか手に入らないラピス専用オリジナル衣装『殲滅天使』プロダクトコードも要チェック！

■仕様：A5判、480ページ　■発行：株式会社KADOKAWA Game Linkage
■発売：株式会社KADOKAWA　■発売日：2020年10月24日　■価格：2,300円（税抜）

ラピス衣装『殲滅天使』コード付き！







最新作は啄木鳥しんき先生描き下ろし!

「空の軌跡SC～絆の在り処～」LINEスタンプ販売開始!

コミック『英雄伝説 空の軌跡SC～絆の在り処～』第5巻の発売を記念して、作者:啄木鳥しんき先生 描き下ろしのLINEスタンプが登場。
コミックの発売日と同日の11月12日(木)よりLINEでの販売が開始されます。
※LINEアプリ⇒ウォレット⇒スタンプショップで「ファルコム」を検索



■発売日:2020年11月12日(木) ■価格:120円
■ファルコムLINEスタンプ紹介ページ https://www.falcom.co.jp/line-stamp

衣装合わせを済ませた頃には夜になっていて、夕食を済ませてからエステルは女子寮にヨシュアは男子寮に向かった。

「では、エステルさん。このベッドを使ってください」

『創の軌跡』の発売を記念して

『軌跡』シリーズの原点を振り返る！

英雄伝説 空の軌跡2 ～黒のオーブメント～

第4回



リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報

好評発売中

著　　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　　価:1,200円(税別)

「ありがと」
　エステルはクローゼに向かって素直に頭を下げる。
　女子寮の一室をエステルは寝泊まりに使ってよいと言われた。その一室はクローゼとジルの部屋だった。二人はルームメイトだったのだ。
「ジルさんと道理で仲がいいわけね」
「ふふ。学園に入って以来の仲です」
「ルームメイトにして腐れ縁ってところかしらね。ベッドに空きがあるのが、この部屋だったし、ちょうどいいよね」
「うん。充分よ。旅をしているとベッドで寝られるだけでありがたいって思うわ」
　エステルが言うと、ジルとクローゼが感心したような顔になった。
「な、なに？」
「いや、やっぱり遊撃士だなって……ところでエステルさん、ひとつ提案があるんだけど」
　ジルが指を一本立てて言ってくる。
「私のことはジルって呼んでくれるかな。私もエステルって呼び捨てにさせてもらうから」
「わかった。そうさせてもらうわ」
「でしたら、私のこともどうか呼び捨てにしてください」
「そう？　だったら、ジル、クローゼ。しばらくの間、よろしくね」

　微笑みかけると、クローゼも笑みを返してくれた。今日一日でずいぶん仲良くなれたなぁとエステルは感慨深い。
「まあ、女所帯だし、気楽にしてくれていいわよ。男どもの目もないしね」
「だからと言って、だらしないのは違うと思うの」
「はあ、いい子ちゃんは大変だね。寮にいるときくらいその被った猫の皮を外して虫干ししたほうがいいわよ？」
「猫なんて被ってません。そんなことを言う子には、お菓子焼いてあげないから」
「あ、うそうそ。冗談だってば」
「だーめ、反省しなさいっ」
「私がわるぅございましたぁ！」
　それまで並んでベッドに腰掛けていたクローゼとジルだったが、ジルのほうがベッドにぴょんと乗ると、正座して深々と頭を下げた。
「もう！　ジルったら……あら？　どうしたんですか、エステルさん？」
「あはは。いやあ～～～、なんだか羨ましいなって思っただけ」
「羨ましい？」
　ジルがきょとんとした顔つきになった。
（そっか。この人たちにはこれが当たり前なんだ……）

「あたしだってロレントに仲のいい友だちはいるけど、あなたたちみたいにずっと一緒でいられるような友人はいなくて」
　ロレントの街に出たときには、年下の男の子たちを引き連れて、街中を駆け回るほうが多かったし。とそのあとに続くのだが、そこは言わないでおく。家の近くは野山で、お隣さんまで歩いて半日かかることも置いておく。
「……………クローゼ、今のエステルの発言をどう思う？」
「どうって……、エステルさんに羨ましがられるのは、ちょっと納得いかないような」
「だよねー」
「です」
　二人して納得し合っていた。
「へ？」
「あ、やっぱり判ってやがらないでやんの」
「な、なにが？」
「あんたねぇ……。自分が、誰と一緒に旅をしているか判ってる？　しかも、自宅ではひとつ屋根の下で暮らしていたんでしょーが」
「え……」
　ようやくエステルにも話が見えた。

「それって、もしかしてヨシュアの話？」
「もしかしなくてもそうです」
「あんな上玉の男の子といつも一緒にいるくせに、女所帯を羨ましがるとは……もったいないオバケが出るわよ？」
「も〜、何言ってるかなぁ。ヨシュアはあたしの兄弟みたいなものだってば。何年もの間、家族同然に暮らしてきたんだから」
「ほほう、家族同然ね……あんたがそのつもりでもヨシュア君はどうかしら？」
　にやりと目を細めてジルが言った。
「え」
「ほら、あの年頃の男の子って、抑えが利かないって言うし。あんたみたいな健康美あふれた子が側にいたら色々とつらかったりして……。判る。判るわぁ。抑えきれない悶々とした青春の懊悩を抱えて日々を過ごす美貌の少年！　萌える！　ねえねえ、エステル、どうよ？」
「ど、どうって…………え？」
　そのときまでエステルは、そんなこと考えてみたことがなかったのだ。
（ヨシュアのほうは……どう思っているか……？）
　エステルは、ごく単純にヨシュアは自分と同じだと思っていた。つまり姉と弟としか見たことがない、と。信じ込んでいた。だが、エステルがヨシュアではないように、ヨシュアはエス

テルではない、のだ。
（か、考えたこと、なかった……）
　そして、一度考え始めると、止まらなくなってしまった。
「もう、ジル！　ごめんなさい、エステルさん。ジルってば、興が乗ると人をからかう悪い癖があるんです」
「ぶーぶー」
　ジルが盛大なブーイングをかました。
「何か文句でも？」
　抑えた口調が逆に怖い。
「……ありません」
「あ、あはは。そ、そうだよね、からかわれているんだよね。もぅ、ビックリさせないでよ。そんな、まさかねぇ。ヨシュアが……だなんて」
「ふっふっふ。意識してる、意識してる」
「ジル！」
　とうとうクローゼが声を張りあげた。短い髪を振り回して、いいかげんにしなさい！　と怒鳴りつける。
「うへぇ。さ、さぁてと、明日も忙しいし、さっさと寝ようっと。二人ともお休みぃ」

　さっさと自分のベッドに戻ると、布団をかぶって寝たフリを始めた。
「もう！　調子いいんだから……。そうだ、エステルさん、私のでよかったらパジャマ貸しますけど……」
　エステルの耳にはクローゼの言葉が届いていない。なんどか話しかけられて、ようやっとぼんやりとクローゼの顔に焦点があった。
「エステルさん？」
「ふぇっ⁉　あ、ああ、パジャマね。うん。貸してくれると嬉しいかな」
　パジャマを借りて、エステルはベッドに潜りこんだ。
　忙しい一日だった。
　朝に孤児院の火事を知りそのまま現場へ見に行った。昼にマノリアの宿屋でテレサ院長と市長のダルモアに会ったっけ。クラムがひとりで《レイヴン》の不良たちの処に殴り込みに行ったのを知り、追いかけた。そうしたら、途中からアガットがやってきた。
　院長先生とクラムを見送ると、今度は王立学園の文化祭を手伝うために学園まで行くことになり、そうしたら――ヨシュアがお姫様役に決まって。
（似合ってたなぁ）
　衣装合わせで着た姫君の白いドレスはヨシュアにぴったりで、うすく化粧をされた顔は、ため息が出るほど綺麗だった。

あれでは弟というより妹だ。しかもエステルより美人の。
弟……。

『あんたがそのつもりでもヨシュア君はどうかしら？』

ジルの言葉が耳の奥で蘇る。
大変な一日だったはずだ。疲れていて、すぐにも眠ってしまうかと思ったけれど、エステルは目が冴えてしまって全然寝付けなかった。
ぐるぐると頭の中でジルの言葉が回っている。ようやく眠気が訪れたのは、時計の針が十二時を回ってからだった。
夢のない眠りへと落ちる。
明け方に一度だけ目が覚めた。
かすかなペンの走る音。そうっと顔を動かすと、手元だけ照らすように明かりを絞って、ジルが劇の台本らしきものにペンを走らせていた。おそらく、役者が決まったので、それに合わせて芝居のプランを変更しているのだ。監督の意向に合わせて、ハンスが台本を書き直すことになるのだろう。どうやら四時間睡眠は本当だったらしい。
ジル・リードナーの横顔には、エステルをからかっていたときの表情とは別の顔が浮かんでいた。
ジェニス王立学園生徒会長の顔だ。
見つめているうちにエステルのまぶたが重くなってくる。いつの間にかうとうとしてきた。
ふたたび眠りの淵をすべり落ちてゆく。
ヨシュアの顔が一瞬だけ頭に浮かんだ。その顔は、父が連れてきたときの、すこし拗ねたような表情の、手間のかかる弟だと思っていたときの顔とはちがっていて。
なんだか別人を見ているみたいな気が、した。

† † †

エステルにとって一度は過ごしてみたいと思っていた学園生徒としての日々。
それは、まるで夢のようにあっという間に過ぎていった。
朝、一緒に目覚めて、昼には特別に授業も受けさせてもらった。食堂でランチを共にして、他愛ないお喋りを繰り返した。
そうして放課後になると、厳しい劇の練習が夜まで続く……。
遊撃士のときとは異なる筋肉を使うために、エステルは意外なことに筋肉痛にまでなってしまった。芝居というのは思ったよりも激しい運動らしい。少ないはずだった台詞は脚本の書き

直しで倍ほどに増えていたが、エステルはなんとか頭の中に叩き込んだ。
最初に見た脚本より、ずっとよくなったとエステルも思う。ハンス君にはどうやらお話を作る才能があるようだ。鬼監督の振るう言葉の鞭のおかげかもしれないが。
そして、学園祭の前日になった。
講堂の正面にある舞台の上で、エステルとクローゼは二人だけで睨みあっていた。
言葉を投げつけあうと、次には互いの剣をぶつけあい、一歩も引かない。何度か切り結んだうえで——ここで剣を合わせるのにいつも失敗していた——互いの剣をぶつけあう。
つば競り合いになった。
睨み合ったエステルとクローゼの緊張した顔がゆるむ。同時に「はあぁ」と息を吐いた。
剣を離して距離を取ると、二人の全身から緊張と力が抜けた。
「やった〜っ。ついに一回も間違わずに、ここのシーンを乗り切ったわ！」
「ふふ、迫真の演技でしたよ」
クローゼが誉めた。
エステルは、首を回して壇の上から講堂を見下ろした。明日の芝居のために、椅子がぎっしりと並べられている。まだ誰も座っていない空っぽの客席だ。だが、明日には訪れた人たちで一杯になるのだ。
「いよいよ、明日は本番ですね。先生とあの子たち、楽しんでくれるでしょうか……」

「ふふ。院長先生たちを本当に大切に思ってるんだね……まるで本当の家族みたい」
エステルの言葉にクローゼは不意に黙り込んだ。
「あ、ごめん。変なこと言っちゃった？」
「いえ……。エステルさんの言う通りなんです。家族というものの大切さを私は先生たちから教わりました……。私、生まれて間もない時に両親を亡くしていますから」
「え……」
「引き取ってくれた親戚は裕福で何不自由のない生活でしたが……家族がどういうものなのか私はまったく知りませんでした」
クローゼの言葉は母を亡くしたエステルにも判る。不自由のない暮らしであることと、淋しくないことはイコールではない。
「そう、十年前のあの日……先生たちに会うまでは」
「十年前……まさか《百日戦役》の時？」
クローゼが頷いた。
帝国との激しい戦争のときだ。あの戦争で、エステルも母を失った。
「ちょうどあの時ルーアンに来ていたんです。帝国軍から逃げる最中に、知っている人ともはぐれてしまい、テレサ先生と、旦那さんのジョセフさんに保護されました」
「そうだったんだ……」

戦争が終わり、孤児院で保護されていることを知った親戚が迎えに来るまでの数か月、クローゼは、テレサとジョセフとそして子どもたちと共に暮らした。

その数か月でクローゼは家族というものを知ったのだ。

血の繋がりはなかったけれど、マーシア孤児院の人々はみな温かく、凍てついていたクローゼの心をゆっくりとほぐして溶かしてくれた。

間違いなくそのときから、あの孤児院はクローゼにとって『ホーム』になったのだ。

エステルはクローゼの話を黙って聞いていた。

クローゼはしばらく昔を思い出すかのように遠い目をしていたが、「そういえば」と話題を切り替えた。

「ヨシュアさん、お芝居の経験がおありなんですか？　すごく上手ですよ」

「あ、うーん。あたしも、出会うまでの事は良く知らなかったりするのよね。あんまり喋りたがらないし」

そう答えたら、クローゼがすまなそうな表情になってしまった。

「あ、気を使わないでいいよ。うーん、確かにヨシュアは何でもそつなくこなすタイプかな。ホント、いつも余裕綽々で可愛くないってゆーか。そのぶん、たまに慌てたりするときなんかは、可愛かったりするんだけどね」

聞いていたクローゼがくすりと小さく微笑む。

「どうしたの？」

「お互いのことをよく見てるんだな、って」

「そ、そうかな。姉弟だったらふつうじゃない？」

「姉弟……そうでしょうか」

「や、やだな～。ジルみたいなこと言わないでよ。クローゼまであたしをからかって」

そう言ったら、なぜかクローゼは黙り込んでしまった。

「……ああ、ここに居たのか」

その声に、エステルの心臓がどきりと跳ねる。クローゼと共に声のほうへと振り返ると、講堂の入り口にヨシュアとハンスがいた。

「捜したよ。そろそろ夕食の時間だから」

ヨシュアが言った。

「明日は本番だしな。練習熱心なのはいいけど、疲れを残さないことも大切だぜ」

そうハンスが言い添える。

エステルもクローゼも素直に頷いた。

「判りました。クラブハウスで食べましょう。そういえば……ジルはどこに？」

クローゼが親友の所在を尋ねる。

「ああ。学園長と打ち合わせがあるとかで、学長室に行ったぜ」

「コリンズ学園長と？　何でしょう……」
　クローゼが首を捻った。
「とりあえず着替えようよ。この格好じゃ歩き回れないし」
「ふふ。そうですね。では、着替えてからジルを迎えに行きましょう。ハンス君、ヨシュアさん、先に食堂に行っていてください」
　二人とも頷いて、講堂から出て行った。あの二人も最近かなり仲良くなったようだ。エステルや父を除いては、あまり積極的に他人とは関わらないように見えるヨシュアにしては珍しい。学園祭というものがもつ、独特の空気のせいだろうか……。
　着替えを済ませて学長室に赴き、ジルを拾ってから食堂へ。一足先に向かったヨシュアとハンスがテーブルを確保してくれていた。
　たっぷり食べて、早めに寝床に就く。
　そうして、学園祭当日の朝がやってきた――。

†
†
†

　学園内はお祭り色に染められていた。
　校舎の外壁には訪れる人々を歓迎する大きな垂れ幕が吊り下げられ、色とりどりの旗や花がそこかしこに飾られている。
　中庭には、いくつもの屋台が出ていて、生徒たちが作る料理や菓子を訪れる客たちへと売っていた。この手の店は、お祭りだと通常価格より割増しになっていたりするものだが、そこは名門校らしく、原価に少額の手数料を上乗せしただけの良心価格だ。訪れる客の中には学園の近隣に住む子どもたちも多いから、彼らにとっては嬉しいことだろう。歓声をあげて屋台に群がっている。
「はいはい。押さないで。充分な数はあるからねー。はい、ボク。どうぞ」
　水あめを手渡された男の子が顔を破顔させて喜んでいた。
　陽気な音楽が校舎の端のほうから聞こえてくる。吹奏楽部の奏でる音楽だった。この日のために彼らも練習を重ねてきた。年に一度の大きな発表会である。
　エステルとヨシュアは、校舎に入ってすぐのロビーにいた。クローゼも一緒だ。
「まだ時間はありますから、お二人で見て回ってきてもいいですよ」
　クローゼがそう言ってくれる。
「えっ、いいの!?」
　喜ぶエステルに、ヨシュアが釘を刺してきた。
「まあ、建前としては学園祭の警護も仕事の内だから羽目は外し過ぎないようにね」
「わ、判ってるってば」

ヨシュアに向かってそう答えつつも、祭りの雰囲気に気持ちが浮き立ってしまうエステルである。

ちなみに遊撃士協会から派遣されてきた正規の警護員は、支部を訪れたときに初めに会った赤いバンダナを巻いた女性遊撃士のカルナだった。つい先ほど挨拶を済ませている。

「あっ、お姉ちゃんたち！」

子どもの声に振り返ると、見た顔の子どもたちが駆け寄ってきた。

「みんな……来てくれたのね！」

クローゼが、腰に抱き着いてくる子どもたちを抱き返しながら言った。すでに屋台でお菓子を手に入れてきている子もいる。

「よく来たわね、チビっ子ども！」

「どう、楽しんでるかい？」

ヨシュアが尋ねると、子どもたちは口々に「楽しい」「お腹いっぱい」と言ってくる。

彼らの背後からテレサ院長が現れた。

「ふふ、こんにちは」

笑みを浮かべて挨拶をされた。その顔は倒れていたときよりも、随分と晴れ晴れとした表情になっていた。エステルはほっと安堵の息をついてしまう。

「今日は招待してくれて本当にありがとうね。子どもたちと一緒に楽しませてもらってますよ」

「まだマノリアの宿屋にいるの？」

「はい。宿の方のご好意で格安で泊めていただいています。ですが……」

そう言って、テレサ院長は口籠った。

言いたいことがあるのに言えない、そんな顔をしていた。それを見てヨシュアが子どもたちに舞台衣装を見せてあげると言い出した。彼らを連れて、講堂の控え室へと連れていく。

「ふふ、ヨシュアさんは本当に気が利く子ですね。ちょっと、子どもたちの前では言いづらいことだったので……」

ヨシュアたちの姿が見えなくなると、テレサ院長が重い口を開いた。

「それじゃ、ひょっとして……」

「ええ、市長のお誘いを受ける決心がつきました」

ルーアンを離れて王都へと移るつもりだと告げる。

クローゼが一瞬だけ傷ついたような表情になる。だが、そんな表情を見せるわけにはいかないと思ったのだろう。すぐに元の顔に戻った。いちばん辛いのはテレサ院長のはずだから。

それでも、ミラを貯めていつかは孤児院を再建するつもりだと言った。

「院長先生……」

エステルは何も言えない。言葉を見つけられない。

「さて、と……。あの子たちを迎えに行かないと。いつまでもヨシュアさんの手を煩わせるわ

けにもいきませんしね」
微笑むと、エステルたちに案内を頼むと言ってくる。
講堂まで向かう間、何を話していいのかも判らずに、エステルもクローゼも口数少なく歩いた。
控え室の扉を開けると、子どもたちが待っていた。衣装係の生徒がちょっとほっとした顔になる。子どもたちはおとなしくしていたようだが、それでも衣装を壊されてはと気が気ではなかったらしい。
「……って、あれれ？　ヨシュアは？」
姿が見えない。
「オイラたちをここに連れてきてから、どっかに行っちゃったぜ」
エステルは胸騒ぎを覚えた。
（この子たちを放りだしていくような性格じゃないはずなのに）
「あたし、どこに行ったか知ってるよー」
そう言ったのは孤児院の女の子のひとりだった。ポーリィという名の女の子だ。はきはきした口調のしっかりした子。
「ヨシュアお兄ちゃんは、銀色のお兄ちゃんをさがしにいったんだよー」
「は？」

（銀色のお兄ちゃんって……なに？）
エステルの胸騒ぎが強くなる。嫌な予感がしてしまう。
「火事があったときにポーリィたちを助けてくれたお兄ちゃんだよっ」
そのひとことで思い出した。テレサ院長が語っていた人物のことだ。燃える建物からの脱出を助けてくれたという。手際の良さから、放火犯ではないにしろ、只者とは思えなかった。その人物がここにいたというのだろうか？
エステルとクローゼは、テレサ院長に断ってから、ヨシュアを追ってみることにした。
講堂から出たところで、クローゼがいったん立ち止まって、空に向かって叫ぶ。
「ジーク！」
空高く舞っていたシロハヤブサが降りてきてクローゼの腕に止まる。
「ヨシュアさんがどこに行ったか判る？」
そう尋ねると、ひと声高く鳴いてから、ジークは校舎のほうへと飛んでいった。くるくると校舎の真上で旋回している。
「屋上……？」
エステルとクローゼは大急ぎで駆けつける。
はたして校舎の屋上にヨシュアはいた。彼の顔を見た途端にエステルは安堵の息をついてしまう。なおも胸にまとわりつく不安な気持ちを首を振って追い払った。

「銀髪のやつは？」
「見失ったみたいだ……」
追いかけてここまで来たものの見失ったらしい。尾行の得意なヨシュアを撒くなんてと、エステルは驚いてしまう。
「でも、放火犯とは違う気がする。僕の勘にすぎないけど」
ヨシュアが言った。
とはいえ、ますます只者に思えなくなってきた。
だが、そこで導力通信による校内放送が流れてきて、劇の出演者とスタッフに講堂へと集まるよう告げてくる。
「あ、もうそんな時間なんだ」
「気にはなりますが、これ以上の追跡は、今はできないようですね。衣装の準備を考えると、もう行かないと」
クローゼも時間を気にしている。
「そうだね……。カルナさんに伝えておいて、注意してもらうしかなさそうだ」
それからきっかり三十分後に劇が始まった。

† † †

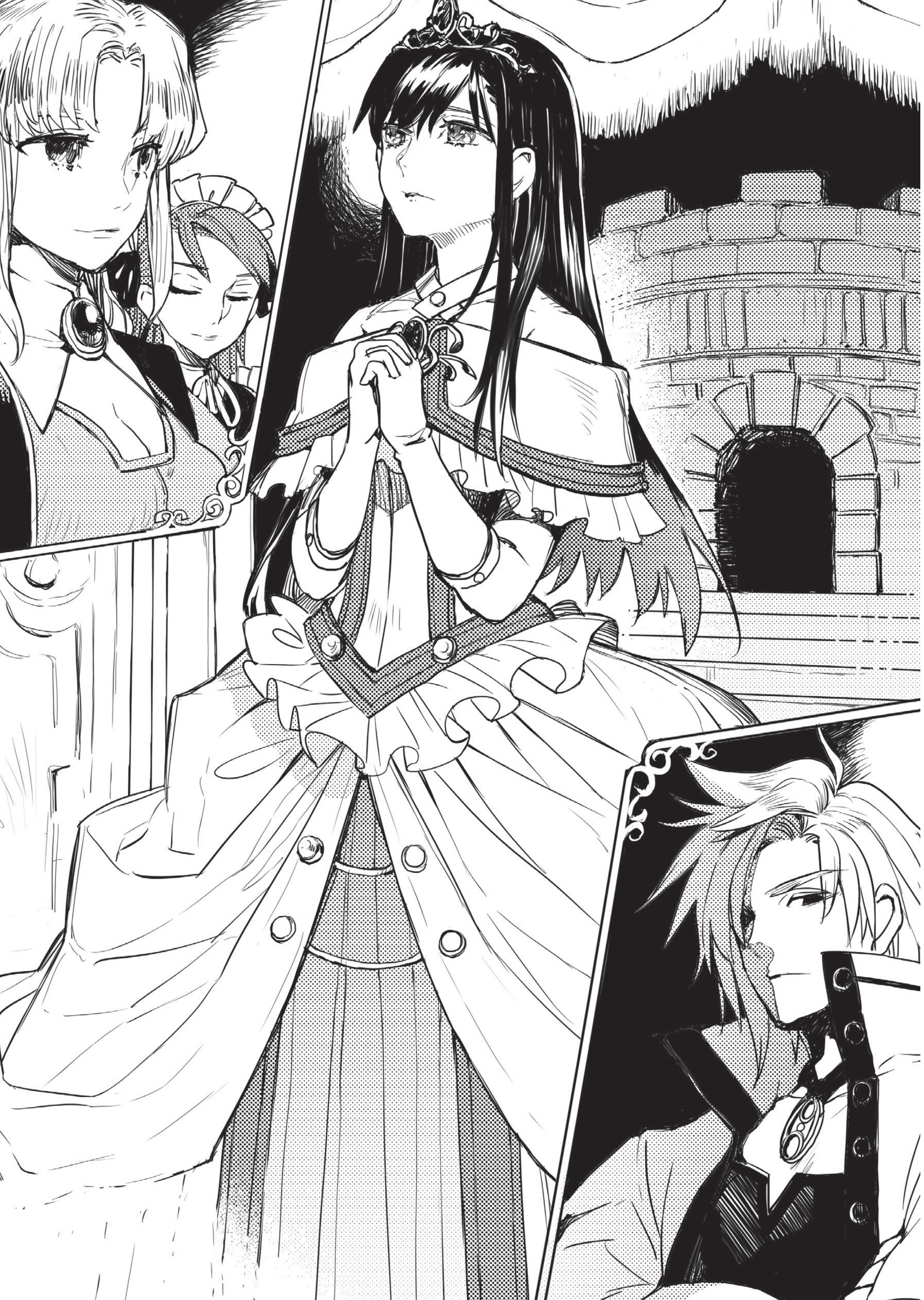
緞帳の脇から客席を覗き見てエステルは驚いた。
「うっわ～……、めちゃめちゃ人がいる～。何だか緊張してきた」
窓には厚いカーテンが引いてあり、天井から吊るされた導力灯の明かりも絞ってあって客席は薄暗い。それでも、並べられた椅子にはぎっしりと人が座っているのが見て取れた。
「懐かしい人も来ているね」
エステルの後ろからちらりと客席を見てヨシュアが言った。
「えっ、どこどこ」
「ほら、貴賓席の処さ。あれって、メイベル市長じゃないかな」
言われて見れば、舞台正面の特等席には名士らしき人々がずらりと並んでいる。その中に懐かしい顔があった。ボース市の市長メイベルだ。いつも一緒の従者のリラも隣に座っている。ボースでの出来事が、ずいぶん昔のことみたいに感じてしまった。
その隣に、女王陛下の甥だというなんとか公爵もいた。
（あれれ？　あいつ、なんて名前だっけ？　名前より、あのぱっつん髪のほうが気になっちゃってたからな～）
ぱっつん公爵の隣には、これまた常に影のように付き従う執事のフィリップがいる。
その隣がダルモア市長だった。約束通りに観に来たようだ。

手前の席には背の低い子どもたち用の椅子が用意されていて、孤児院のちびっ子たちはそこにいた。端の席に座ってテレサ院長が見守っている。
（ん？　……今なんか違和感があったような）
「始まるよ……」
小声でヨシュアが告げてくる。
エステルとヨシュアは舞台の袖に移動した。エステルが少しだけ感じた違和感は、開演の緊張に呑まれてどこかへと消えてしまった……。
「ただ今より、生徒会が主催する史劇、《白き花のマドリガル》を上演します」
生徒会長自らの声を合図に劇が始まる。
絞ってあった導力灯の明かりはさらに暗くなり、遂には消えてしまう。それと入れ替わるように緞帳がゆるゆると上がっていって、舞台の端にスポットライトが当たった。
制服姿のジルが光の中に浮かび上がる。
たたずんだまま、前口上を語り始めた。
「時は七耀暦一二〇〇年代……」
すらすらと淀みなく口にするのは、劇のおおよその時代背景とメインとなる部分までのあらすじだった。さすがに学園祭の時間内では物語のすべてを語るには短すぎる。
あらましを語り終えると、スポットライトは消え、檀上の舞台全体が明るくなる。

お城の庭園を模した書き割りが現れ、その中に白いドレスを着た姫君が立っていた。
ヨシュア演じるところの白の姫セシリアである。
俯いた清楚な佇まいに客たちは息を呑む。白の姫が顔をあげると、化粧をほどこした美しい顔(かんばせ)が露わになり、客たちは詰めていた息をほうっと吐きだした。
みな、見蕩れているのだ。
姫君を囲むようにお付きの侍女たちが現れた。
「姫様……こんな所にいらっしゃいましたか」
野太い男の声だった。
客たちのうっとりとしたため息が、悲鳴混じりのひぃという声に変わる。慌ててパンフレットをめくる音。さざなみのようなざわめきが客席に広がる。客たちが、今回の劇は男女が入れ替わっているのだと気づいたのだ。
ということはこの姫君も……。
「わたくし、結婚などしません。お父様の遺言とはいえ、こればかりはどうしても……」
鈴を転がすような涼やかな声が耳を打った。
先ほどとは異なるざわめきが客席を広がっていった。客たちの視線が壇上にぐいと引き寄せられた瞬間だった。

「まあ、あのお姫様は……ヨシュアさんではありませんか」
感嘆の声をあげたのは、ボース市長メイベルだ。整った顔の少年だとは思っていましたが、と続ける。
「はい、お嬢様。ただヨシュア様はともかく、他の侍女の方はちょっと……。せめてすね毛は剃っていただきたかったですね」
こんなときにも辛辣なリラだった。

舞台の上で芝居は続いていた。
白の姫セシリアには、求婚者が二人いた。国王亡き今、彼女はどちらかと結婚しなければならない。ひとりはエステルが演じる貴族出身の紅の騎士ユリウス。もうひとりはクローゼが演じる平民出身の蒼の騎士オスカーだ。二人ともセシリアの幼馴染みで、セシリアは選ぶことができずにいた。
エステルとクローゼの二人が騎士姿で舞台に現れると、客席からは黄色い声が飛んだ。
この日を楽しみにしていた学園の女生徒たちである。
「イイ！　イモ男子どもと比べたら、めっちゃステキー！」
「きゃあ！　クローゼさーん！」
歓声を聞いて仏頂面になるのは男子たちである。



マーシア孤児院の女の子一同も、もちろんエステルとクローゼの二人に声援を贈っていた。ちぇ、とクラムが舌を鳴らして、マリィに「こら」と窘められていた。

《白き花のマドリガル》の基本は喜劇であって、笑いどころの多い芝居である。それに男女を入れ替えたことによる珍妙さが加わって、客席からは笑いが絶えなかった。

舞台の袖で事を仕組んだ生徒会長がにんまりと笑みを浮かべる。

それでも、劇が中盤に差し掛かると、盛り上がりに合わせるように次第にストーリーは緊迫さを増していった。

貴族階級と平民階級の対立が激しさを増し、幼馴染みであるユリウスとオスカーは、互いの属する陣営に引っ張られるように対立を余儀なくされていったのだ。

客席は静まり返り、舞台の上の物語が向かう先を、固唾を呑んで見つめていた。

二人の間に挟まれて、白き姫は悩みつづける……。

そんな最中、蒼の騎士オスカーが暗殺者に襲われ、腕を傷つけられてしまう！

「なーるほど……なかなか見せてくれるじゃねえか。となるとこの次の展開は――っと、いかんいかん。危うく仕事を忘れるところだったぜ……」

つぶやいた男は貴賓席へと視線を戻した。誰あろう、リベール通信社の敏腕記者ナイアル・バーンズである。

「しっかし、こんな時期に学園祭で観劇ねぇ」

ナイアルの視線はひとりの男に注がれている……。

† † †

芝居はクライマックスに差し掛かっていた。

貴族と平民の両陣営の決定的な対立を避けようと、紅の騎士ユリウスがセシリア姫に、ある提案を行ったのだ。自分と、オスカーの決闘を許可して欲しい、と。

「そして勝者には……姫の夫たる幸運をお与えください」

セシリアは息を呑んだ。

来るべきものが来た、と思ったからだ。

断ることはできない。それを白の姫は理解していた。ユリウスとオスカーは、二つの陣営の代表者として担ぎ上げられてしまっている。そうして、いつまでもセシリアが二人から夫を、つまり王を選べないから、それを口実に対立がつづいている。

このままいけば、ほんとうに流血の革命が始まってしまうだろう。だが、正式な決闘の末にどちらかを選んだのならば、とりあえず両陣営の争いの口実をなくすことができるのだ。ユリウスはそれを承知していた。

「判っていて、それでもわたくしには、どうすることもできなかった……」
つぶやくような姫の声を合図に、舞台の上の照明が消えた。
「そして決闘の日……」
ジルの声が舞台の袖から響く。
照明がふたたび点ると、書き割りはクライマックスに相応しく、王都にある競技場を模したものへと変わっていた。それまでに登場したすべての人物が扇状に見守る中、ユリウスとオスカーの――エステルとクローゼの決闘が始まった。
「おお、我ら二人の魂、女神エイドスもご照覧あれ！　いざ、尋常に勝負！」
クローゼが立て板に水と声を張り上げる。
「応！」とエステルも応えた。
舞台の上で、二人の騎士が剣をぶつけあって戦う。
模造剣とはいえ、見栄えを良くするためにそれなりの重さのものを使っていた。打ち合う剣の音は、舞台袖で小道具係が鋼を叩いて鳴らしていたが、遊撃士であるエステルと、フェンシングチャンピオンであるクローゼの剣捌きは素人のものとは一線を画していて、見つめる観客たちは息を呑んでしまう。
「やるな、ユリウス……」
「それはこちらの台詞だ」

つば競り合いから離れて、エステルとクローゼはふたたび激しく切り合った。
現実の二人の腕前は同じくらいであったけれど、舞台の上では次第にユリウス、つまりエステルが押し始める。クローゼは腕を庇うかのような演技を見せた。
劣勢に立ったクローゼは、ひとつ大きく息を吐くと、最後の反撃に出た。だが、その攻撃のすべてをエステルは凌いだのだ。そして、双方のすべてを賭けた最後の一撃が撃ちこまれる。
まさにその瞬間だった。
二人の突きだす剣の間に、真っ白なドレスが飛び込んだ。
「な…………」
「セ……シリア……？」
白いドレスが崩れ落ちる。真っ赤な血がみるみるうちに白いドレスを赤く染めていく。
絞った赤いスポットライトを徐々にドレス全体に広げていっただけだが、客席では思わず悲鳴をあげてしまった者もいた。
ヨシュア扮するセシリアはクライマックスにと用意された脚本担当ハンスの渾身の台詞をとうとうと紡いでゆく。
二人の騎士への想いを語り、同じ国の民同士で争い合うことを哀しんだ。
「ああ……目がかすんでゆく……」
客席からはすすり泣く声が聞こえていた。

「見えるわ……幼い頃……お城を抜け出して遊びに行った……路地裏の……」
細い腕を天に向かって伸ばしながら、ヨシュアは台詞をひとことひとこと情感込めて語りつづけた。
「オスカーも……ユリウスも……あんなに楽しそうに笑って……」
過去の思い出を語りながら、セシリアはゆっくりと目を閉じた。天に伸ばしていた腕がことりと落ちる。
ふっとセシリアに当たっていた赤いスポットライトが消え、彼女の命の火が消えたことを暗示した。
二人の騎士の腕の中で。
取り巻いていた両陣営の者たちも、一様に顔を伏せて苦痛の表情を浮かべる。
「姫様、おかわいそうに……」
「ああ、どうしてこんな事に……」
侍女たちが嘆く。
囲んでいた両陣営の中からも姫の死を悼む声があがり、セシリアの命を天に召した空の女神エイドスの所業を恨む声もあがった。
「まだ判らないのですか……」
厳かな声が響く。
舞台の後方の一段高くなった処にスポットライトがあたった。白い服を纏い、羽を背負った女性が光の中で立ち上がる。学内アンケートトップの美少女が、わずか数行の台詞を言うために立ち上がった。彼女はその役に満足していた。
リベール王国民の信奉する空の女神エイドスの役だったからだ。
女神が人々の勝手な言い草を咎めると、遠巻きにしていた両陣営のすべての人物が目を伏せた。彼らの心からの悔恨を見て取ると、エイドス役の少女は二人の騎士にも教え諭した。
エステルとクローゼも俯いて、唇を噛みしめて神妙な顔を作る。
「それぞれの心に思い当たる所があったようですね。なれば、リベールにはまだ未来が残されているでしょう」
そう言うと、空の女神は両の手をゆっくりと掲げた。
徐々にエイドスに当たっていたライトが弱くなってゆく。それに応じるように女神は上げていた両の手を打ち下ろした。
一瞬、すべての照明が消えた。
それから、舞台の中央に白いスポットライトが当たる。
光の円錐の中を立ち上がる影がひとつ。
おお、と観客席からもどよめきが起こった。
白の姫が蘇ったのだ。

「フフ……神の奇蹟というわけか……そんなものが信じられるのならばな……」
　舞台の出口付近で立ちながら見ていた男がつぶやいた。まだ終わらない劇に背を向けると扉を開けて出ていく。
　日の当たる外へと出た男の髪は銀色だった。

　蘇ったセシリア姫を前にして、紅の騎士ユリウスが自分の負けを認めた。暗殺者に傷つけられた腕で互角の勝負をしたオスカーこそが勝者だと告げる。
「待て、ユリウス！」
「勘違いするな、オスカー。姫を諦めたわけではない。お前の傷が癒えたら、今度こそ決着をつけようではないか……木剣でな。幼きあの日々のように……」
「ああ、……きっとな」
「もう、二人とも……。わたくしの意志は無視ですか」
「そういうわけではありませんが。今日のところは勝者へのキスを。みながそれを望んでおります」
　そう言い残して、エステルは退場する。台詞を口から出したとき、なんだかもやもやしたものがエステルの胸に湧いた。なんだろうと思いながらも袖に捌ける。

「オスカー……」
「姫……」
　セシリアの顔が、オスカーへと近づく。
　舞台袖からエステルは見ていた。
　ヨシュアは、目をつぶって、それからクローゼの頬に軽くキスをする。
　取り囲む登場人物たちから拍手と歓声が沸き起こり、それは客席全体へと爆発的に広がっていった。
「女神エイドスも照覧あれ！　今日という良き日が、いつまでも続きますように！」
　クローゼが最後の台詞を口にする。
「リベールに永遠の平和を！」
　囲んでいた両陣営の者たちがそう繰り返すなか、ゆっくりと緞帳が降りてくる。
　万雷の拍手とともに劇が終わった。
　それとともに、放送が学園祭の終了を告げる。講堂に導力灯の明かりが戻り、客たちは芝居の興奮も冷めやらないまま出口へと流れてゆく。
　王立学園の学園祭は大好評のうちに幕を閉じた。

第十二幕　真相

楽屋裏の控え室に戻ってからも、エステルはうわの空のままだった。
心ここにあらずだった。なんとなく……なんとなくだが、もやもやする。
クローゼに呼びかけられてもしばらくは反応できず、ヨシュアに声を掛けられたときなどはあからさまに狼狽えてしまった。
ノックの音とともにテレサ院長と子どもたちが姿を見せ、それでようやく考えごとをやめて目の前のことに集中できたくらいだ。
テレサ院長と子どもたちにも芝居の出来を誉められて、エステルたちは照れた。頑張ったことを誉められるのは嬉しいし、子どもたちに喜んでもらえたのは、もっと素敵なことだと思う。
だが、それよりもさらに素晴らしいことが起きた。
話の途中で、控え室にコリンズ学園長がやってきた。その後ろにはいつの間にか楽屋裏から姿を消していたジルがいた。そして、学園長は孤児院の火事の件にお悔やみを告げてから、学園からも微力ながら力添えをしたいと言ったのだ。
「ジル君」
声に応じて傍らに控えていたジルが、王立学園の紋章が入った分厚い封筒をテレサ院長に手渡した。

「どうぞ、受け取ってください」
「これは……？」
「うむ。実はですな。学園祭に来た父兄の方々に事情を話してから、例年のように寄付金をお願いしてみたところ、わずかながらも集まりました。ちょうど百万ミラあります。孤児院再建に役立ててください」
「ひゃ、ひゃく万ミラ！」
エステルは声がひっくり返ってしまった。わずかどころではない大金だ。テレサ院長も驚いた顔をしている。
「今回は公爵や市長など名士が集まりましたからね。開演間近にやってきたダルモア市長などは、私が話を持ちかけると、集まった額を聞いて驚いていました。もちろん彼も快く協力してくれましたよ」
「そんないけません！」
「遠慮する必要はありませんよ。毎年、学園祭で集まった寄付金は福祉活動に使われることになっているのですから。ちゃんと集めるときに確認も取りましたからね。みな、孤児院のことを心配してくれていましたよ」
「学園長……」
クローゼも声を詰まらせた。

ジルがそんなクローゼの肩を抱き、ぽんぽんと背中を叩く。エステルもようやく思い至った。
芝居が始まる前の日、ジルが学園長と打ち合わせていたのは、この件だったに違いない。
「でも、こんな大金を……」
「先生……」
「クローゼ？」
「先生が戸惑う気持ちも判ります。でも……どうか考えてみて欲しいんです。それだけのミラがあったら孤児院を再建するのはもちろん、王都に行く必要もありません。あのハーブ畑だって、放っておかなくてもいいんです」
クローゼの言葉をテレサ院長は黙って聞いていた。コリンズ学園長がクローゼの言葉を引き取って、亡きジョセフのためにもとミラを受け取るように説得した。
「わかりました。ありがとう……本当にありがとうございます……」
声が震え、涙が零れ落ちる。
事情が判らずに戸惑っているのは子どもたちだ。大好きな院長先生が泣きだしてしまったので、どうしていいか判らずにいた。そんな子どもたちを、テレサ院長は黙って抱きしめる。
「あなたたちには……本当に苦労をかけましたね……」
見ていたエステルまでもらい泣きをしてしまった。
大きな腕に抱かれてクラムがこそばゆそうな顔をしながら、「別に苦労なんてしてねえけど」

と言った。
「でも、なんで泣いてるのに、嬉しそうなんだ？」
「バカねぇ、クラムったら。涙は嬉しいときだって流れるからよ」
「そうか？」
「そうよ。子どもには判んないかもしんないけど」
おしゃまなマリィがクラムに言い聞かせた。

† † †

テレサ院長が子どもたちと共にマノリアの村へと帰ると、エステルたちは学園祭の後片付けに取り掛かった。
「そういや、院長先生たち……あんな大金を持ち歩いて、ちょっと危なくなかったか？」
ふとそう漏らしたのはハンスだ。小道具を仕舞い込む手を止めて心配そうな顔つきになる。
それを聞いてエステルも不安になった。
「あ、それは大丈夫よ。警備に来ていた遊撃士に護衛を頼んでたから」
ジルが答えた。
「わざわざ学園長さんが頼んでくれたみたいだね。カルナさんなら安心できると思うよ」

技量を見抜くことに長けているヨシュアの押す判子は信用できた。
「そっか。よし、さっさと片付けを終わらせちゃおう！」
三十分ほどを費やして、道具の片づけもゴミだしも終わって後は帰るだけになった。
もうひと晩泊っていかないかと誘われたが、エステルたちは、まだルーアンに所属してから、ほとんど支部の仕事を受けていない。丁重に断って帰り支度を整える。週明けまでの休みをもらったクローゼが、院長先生と子どもたちに会いにマノリア村まで行くというので、途中まで一緒に行くことになった。
ジルやハンスと再会を約束して、エステルたちは学園を出る。
「数日間だけだったけど、すっごく楽しかったわね～」
「授業を除いて、でしょ。君の場合」
「あはは。まあね！」
「ふう。学生の本分は授業のほうなんだけど……」
エステルとヨシュアのやりとりに脇を歩くクローゼがくすりと笑った。
「……あら？」
ふいに立ち止まると、クローゼがきょろきょろと辺りを見回す。
「ん？　どしたの？」
「いえ……ジークの気配が近くに感じられなくて……」

クローゼは空を見上げてから、また視線を戻した。
「ゴハンでも取りに行ってるんじゃないの？」
エステルが言って、クローゼもそうかもと頷いた。
「すみません。変なことを言って……」
そう言って頭を下げる。
そのときは誰も気にしていなかった。エステルもヨシュアも、とうのクローゼさえ。学園祭が大成功に終わったから、緊張が解けて少し注意力が落ちていたのかもしれない。
三人は並んで街道を西へと歩いた。
マノリアの村とルーアンの街への分岐点まで来て、別れの挨拶をしあう。お互いにしんみりとした気分になっていたのだけど……。
「おお、あ、あんたたちは！」
街道の先から声が掛かった。
マノリアの村のほうからやってきた青年がエステルたちを見つけて駆け寄ってくる。どこかで見た顔だとエステルは記憶をひっくり返した。マノリアの村に住む住民で、孤児院が焼けたときに後始末に駆けつけてくれた青年だと思い出す。
青年はひどく慌てていた。今にも卒倒しそうなほど息を切らしている。汗だくなのはここまで走ってきたからだろうか……。

「大変なことが起こったんだ！」
　息を整える暇もなくそう言った。声の調子にエステルは思わず身構える。
「大変なこと？」
「はあはあはあ……ちょ、ちょっと待ってくれ！」
　息が切れて話せないらしい。青年が呼吸を整えるまでの数秒がエステルには長く感じられた。嫌な予感が消えない。
「はあはあ。マ……マノリアの近くで、テレサ先生が襲われた」
「あ、あんですって！」
　息を呑んでしまう。全身から血の気が引くのが自分でもわかった。
「…………あ……」
　クローゼがふらりとよろめいて倒れそうになる。すかさずヨシュアが支えた。
　青年に向かって問いかける。
「だ、大丈夫です……詳しいことを教えてください」
　彼の話によれば、テレサ院長たちは学園祭から街道を戻る途中に襲われたらしい。子どもたちにケガはなかったものの、院長と護衛の遊撃士が気絶させられたという。
「カ、カルナさんが気絶⁉」
「それは……相当の手練れの仕業みたいだね」

「遊撃士協会の支部に連絡しようとしたんだが、宿の通信器が壊れたみたいでな。仕方なく俺が大急ぎで走ってきたんだ」
　話を聞いたあとのヨシュアの判断は素早かった。青年にはそのままルーアンの街の支部に報告を頼み、自分たちはすぐにマノリアへ向かうと言ったのだ。
「お、おう。わかった！　任せとけ！」
　青年は街道をルーアンに向かって走りだした。
「さあ、僕たちも急ごう！」
　ヨシュアが言って、エステルもクローゼも頷いた。

　マノリア村に着いたのは夕暮れ間近な時刻だった。
　宿屋を訪ねると、ふたたびテレサ院長がベッドに横たわる光景を見ることになった。隣のベッドにはカルナも寝ている。周りで心配そうに寝顔を見ていた子どもたちが、駆けつけたエステルたちに気付くと、いっせいに泣きついてきた。
「良かった……あんたたちは無事みたいね」
　ヨシュアが、様子を見にきた宿屋の女将に容態を尋ねる。ケガはしていないようだが、目を醒まさないんだ、と教えてくれた。
「……ちょっといいですか」

そう断ると、ヨシュアは眠っている二人の枕元に立って顔を近づけた。鼻をひくひくと動かしている。
「睡眠薬を嗅がされたみたいだ」
「す、睡眠薬ぅ？」
「うん。この特徴的な刺激のある臭いはたぶんそう。副作用がないやつだと思うから、安心してもいいと思うけどね」
ヨシュアが請け負った。
（薬品についてなんて、遊撃士になるときに教わったっけ？）
エステルは覚えていない。エステルだから覚えてないだけかもしれないが。それはともかく何があったのかが気になった。でも、事情を知っていそうなのは子どもたちだけで……。彼らの顔を見廻していたら、いちばん年長の少女が「あたしが説明します」と言った。
「マリィちゃん……」
「だいじょぶです、クローゼお姉ちゃん。あたし、話せます」
「判った。でも、無理はしないでいいのよ？」
こくんとひとつ頷くと、マリィが事情を話してくれた。
「あたしたち、遊撃士のお姉ちゃんと一緒に歩いていたんですけど……いきなり覆面を被った変な人たちが現れたんです」

「ふ、覆面……!?」
「はい。それで……遊撃士のお姉ちゃんが追い払おうとしたんだけど、すぐに囲まれちゃって……先生もあたしたちを守って……それでそれで――」
すすり泣きながらそれでもマリィは話してくれた。
「よしよし、怖かったね……」
エステルはマリィを抱きしめて背中をさすってやった。それまで唇を噛みしめて何かに耐えていたクラムが口を開く。
「あいつら先生のふところから、あの封筒を奪ったんだ……取り戻そうとしたんだけど、思いっきり突き飛ばされて……ヨシュア兄ちゃん、オイラ……守れなかったよ」
そう言って、また唇を噛みしめた。
「そんなことないさ。君は自分自身の身を守れたわけだからね。それが先生にはいちばん嬉しいことだと思うよ」
ヨシュアが横たわるテレサ院長を見つめながら言った。
「だから、自分を責めちゃだめだ」
「兄ちゃん……でも……」
涙をこらえるクラムを見て、エステルの中で何かがぷちんと切れる音がした。
「許せない……」

握りしめた拳がぶるぶると震えていた。どこのどいつの仕業か判らないが、今そいつが目の前にいたら、間違いなくエステルは殴り掛かっていただろう。
「誰がこんなことを」
「はっきりしているのは、犯人は相当の手練れだということです。遊撃士の方が為す術もなく無力化されたわけですから」
声は静かで落ち着いていたが、クローゼも間違いなく怒っていた。さらに続けて、クローゼは自らの推測を述べる。
「そしてもうひとつ……。これは計画的な犯行だと思います」
「え……？」
「犯人たちは自分たちの奪うものをはっきりと自覚していたように思えます」
「先生のもっていた紙袋、を？」
「はい。そこに百万ミラの寄付金が入っていたことを知っていたように思えるのです。犯人たちは、まっすぐ先生の懐にある封筒を狙ったのですから」
「ちょ、ちょっと待って。じゃあ、犯人は寄付金のことも知っていたってことになるわよ」
「おそらく……。孤児院を放火したのも、その人たちかと」
「えええ！」
クローゼの推測にエステルは驚いてしまった。毎年学園祭で募る寄付金から、今年は百万ミ

ラがマーシア孤児院再建のために寄贈された。それを知っている人間は、さほど多くないはずだ。エステルも、クローゼさえ渡される直前まで知らなかったのだから。
少なくとも、犯人は王立学園の学園祭に来ていたということになる……。しかも、強盗犯が放火犯でもあるなんて。
「うん、その可能性が高そうだ」
ヨシュアが頷いた。
エステルには見えていない何かがヨシュアには見えているということだろうか。
「とにかく、今は一刻も早く犯人の行方を突き止めないと……」
百万ミラが無くなれば、テレサ院長は当初の予定通りに王都に向かわざるを得なくなる。
入口の開く音がした。
「そいつは同感だな」
大きな剣を背負った赤毛の青年が戸口に立っていた。
「あーっ！」
エステルは思わず叫んでしまった。
姿を現したのは《重剣》のアガットだったのだ。

† † †



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.117

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！





1 1名様
ゆるみっしぃのゆるふわチャーム
カバンにくっつけたり部屋に飾ったりできる、
ゆるみっしぃを1名にプレゼント!!（サイズは
足から耳まで約10cm）

2 3名様
『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ
大人気のオリジナル缶バッジを5個セットを
3名にプレゼント!（※絵柄はランダムです）

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.117プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①『創の軌跡』で印象に残った
　BGMは何ですか？
　アンケート②『軌跡』シリーズでお気に入りの
　BGMは何ですか？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：暁の軌跡最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC
　～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：英雄伝説 空の軌跡

応募締め切り　11月26日（木）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。